Tristan Clément
2022年8月6日

ウィリアム・テルの物語

アルトドルフ村は、スイスの最初の3州の「ウーリ州」にある、のどかな山村だった。そこに住む人々はゆったりした生活を送っていた。

市場が開催される日は、村の広場が人で埋まって、賑わっていた。

村の人が商品を交換したり、近況を知らせたり、笑ったりしていた。しかし、その朝は違った。なぜなら、とんでもない情報が入ったからであった。

「ドイツ皇帝のアルベルト1世が代官を送ってきた」と村の人が言った。

「ヘルマン・ゲスラーだ！」ともう一人が言った。

「皇帝に反発した、3州が盟約を交わしたことを後悔させたいのだろうな。」と誰かが説明する。

「税金で苦しめられるよ…」

「嫌な予感がするな…」と商人がボソボソ言った。

彼らの予感は正しかった。

ヘルマン・ゲスラーはどんな人か、すぐに村の人々は理解した。彼と違う意見の人を皆牢に閉じ込める残忍な暴君だった。彼に逆らうと激怒して、皆が彼を恐れていた。

ある日の朝、村の広場に代官の家来が大きな杭を立てた。杭の先に代官の帽子が置いてあった。家来の一人が言う「今日からこの杭の前を歩く人は皆、その杭が主かのように挨拶をするのだ。逆らう者には厳しい罰を与える。」

帽子に挨拶をするなんて、誰もそんなことを見たことはなかった。馬鹿馬鹿しい、村人を貶める行為だと皆が思った。しかし、逆らう者はいなかった。皆が代官の怒りを恐れていたからだ。そうして、杭の前を通る男の村人は、プライドを捨てて、脱帽して頭を下げた。女の村人はお辞儀をした。

ある朝、山に住んでいたウィリアム・テルが、10歳の息子を連れてアルトドルフ村の市場に向かった。村人はみんな彼を慕っていた。ウィリアム・テルは勇ましくて、強くて、国でいちばんの弩(いしゆみ)を上手に撃つ人として知られていた。

ウィリアム・テルが広場に着くと、帽子に挨拶しなかったことを見た女の村人が慌てて言った「あっちの帽子に挨拶をしないと、ゲスラーに罰せられてしまうのよ」。ウィリアム・テルが上を向いて、帽子を見て、眉をひそめて挨拶せずに歩き続ける。「脱帽してください、でないと後悔するよ。」ともう一人が彼に言った。

しかし、ウィリアム・テルは脱帽も挨拶もせず、歩き続ける。

ゲスラーがそれを知ってしまえばとんでもないことになるだろう。

市場で買い物していた、ある人がゲスラーに言いつけたら報酬がもらえると思って、ウィリアム・テルが命令に逆らったことを教えた。

「ウィリアム・テル？誰だ？」

「彼はこの辺りのいちばん腕のいい弩の射手です。100歩離れたりんごを当てることができます。」

それを聞いたゲスラーが怒り出して、拳で机を叩き、密告者をむち打ちに処した。むちで叩かれた人は「報酬はもらえなかった」と嘆いた。

「ウィリアム・テルを逮捕しろ」とゲスラーが家来に命令した。「彼の息子も」と付け加えた。

ウィリアム・テルとその息子が代官の前に連れていかれて、彼が怒った。「俺の命令に従わなかったと聞いている。」「そうですね」と冷静にウィリアム・テルが言った。「帽子に挨拶なんて卑屈なことはしません。」それを聞いたゲスラーは激しく怒って、しばらくしたら微笑んだ。彼は卑劣な復讐を思いついた。

「あなたはこの辺りのいちばん腕のいい弩の射手と聞いている。木に実っているリンゴをみ撃てると？じゃあ証明してもらおう。」

ゲスラーがウィリアム・テルの息子の腕を取り、木の前に連れて行った。そして、通りすがりの女性のかごからりんごを取り出して、子供の頭の上に置いた。

ウィリアム・テルにニヤニヤ笑いかけてこう言った「100歩離れて息子の頭に乗っているリンゴを撃て。当たれば自由だ。しかし、拒否したり、外したりすれば、二人とも一生牢獄に閉じ込めてやる。」

周りで見ていた人が「なんて酷い」と驚き嘆いた。外してしまったら…

ウィリアム・テルにとって恐ろしい罰だった。もし外してしまったら息子を傷つけることになり、自分を許せないと思った。しかし拒否すれば、息子は一生牢獄で過ごすことになる。仕方ない。彼は怒りを抑えて、矢を2本用意した。そして100歩歩いて、振り向いて、息子を見た。

周りの皆が息を呑んだ。頭にりんごを乗せられたウィリアム・テルの息子は震えないように必死だった。すごく怖かったが、父のことが分かっていて、信用していた。

ウィリアム・テルが弩を引き、じっくりと狙いを定めた。そして矢を射った。

矢がしゅっと飛んでいき、りんごの真ん中を貫き、木に突き刺さった。息子の髪の毛は一本だに動かなかった。

「やった！ウィリアム・テル万歳！」と皆が歓声を上げた。

子供がウィリアム・テルの方に走って「パパ！」

「自由だ！」と誰かが叫んだ。

激怒に駆られたゲスラーが顔をしかめた。彼の負けだった。

ゲスラーがウィリアム・テルに近づいて負けを認めようとしたが、テルが2本目の矢を片付けているところを見た。「どうして2本目を用意したのか？」とゲスラーが聞いたら、ウィリアム・テルが冷静に「万が一外して息子を傷つけてしまったら、この2本目であなたを殺した。」と答えた。

ヘルマン・ゲスラーがまた怒り出した。

「この男と息子を捕らえろ。俺の城の牢に投げ込んでやれ！」

それを聞いた村人たちが反抗の声を上げた。ゲスラーは約束していた。ウィリアム・テルが自由を勝ち取ったのだ。しかし、ゲスラーは約束などどうでもいいと思っていた。

ゲスラーのお城は湖の向こうにあったから、ウィリアム・テルと彼の息子を小舟に乗せた。逃げないように、ゲスラーとその家来も一緒に乗った。しかし、軽い船が湖の真ん中に着いたら、嵐が吹き始めた。雷が大きく鳴って、風が激しく吹いた。

ゲスラーとその家来が慌てて、動けなくなった。ウィリアム・テルだけが冷静を保っていた。それを見たゲスラーはウィリアム・テルに舵を取らせて、助けてくれとお願いした。「助けてくれたら、自由にしてやるよ」と約束をした。

ウィリアム・テルは無言でうなずいて、舵をとって、ゲスラーの家来に指示をした。嵐が吹いていて、小舟に水が入っていた。しかし、ウィリアム・テルは上手に舟を操った。

やがて陸(おか)が見えてきた。ゲスラーはテルを見た。「陸に着いたら、ウィリアム・テルをとらえる。約束なんて知ったこっちゃない。」しかし、ウィリアム・テルはゲスラーの性格を知っていて、信用していなかった。舟が陸に着いた途端、息子の手と弩を取って、舟から出て、舟を湖に流して逃げて行った。あまりにも速すぎて、ゲスラー達は何も出来なかった。

ゲスラーの舟が長い間波に揉まれて、ゲスラーは何回も死ぬかと思った。しかし、朝になったら嵐がおさまった。へとへとのゲスラーが必ずウィリアム・テルに復讐を果たすと誓った。

でも、ウィリアム・テルは消えたかのように姿を現すことがなかった。ゲスラーはだんだん飽きて、やがてウィリアム・テルのことを忘れてしまった。彼は元の生活に戻って、村の人を勝手に牢獄に閉じ込めたり罰したりした。アルトドルフの広場には帽子を被らせた杭がまだ立っていた。

ある日、ゲスラーと何人かの家来が税金を取りに出た。しかし森の中で、農家の待ち伏せに遭って、馬から落とされた。

意地悪で臆病なゲスラーはこそこそ逃げようとした。すると、どこからか矢が飛んできて、ゲスラーの心臓に刺さった。目を見張ったゲスラーが叫ぼうとしたが、そのまま倒れた。死んでいた。

ゲスラーの死体が村に戻り、村民が矢を抜こうとした。そうしたら、ウィリアム・テルがゲスラーを殺すために用意していた、2本目の矢だということに気がついた。暴君から解放されていた。皆が喜んで、歓声を上げた。

こうしてウィリアム・テルが伝説になったが、彼の前にも、彼の後にも、皇帝に屈せず、代官を国から追い払った英雄が何人かいた。彼らの勇気のおかげで、スイスは今自由な国である。